

## 『タンホイザー』にみる「第三帝国の言語」

—「ワグネリアンの言語」?—

細川裕史

### 1. はじめに

ワグナーは、「楽劇」の創始者として、ドイツ国内に限らず、世界の音楽史に大きな功績を残した人物である。そのため、多くの音楽研究家の手によって解釈が試みられてきた。それに比べると、ワグナーについて言語学的な観点から研究するということは少ないようだ。しかし、あえて言語学の観点から彼の作品を考察してみたいと思うことは、決して奇異なことでもないだろう。なぜなら、ドイツ言語学界が関心を寄せているテーマである「第三帝国の言語」(Lingua Tertii Imperii)と、ワグナーの作品に見られる言語には、共通点があるかもしれないからだ。ペーター・フォン・ポーレンツ(Peter von Polenz)の『ドイツ語史』によれば、「第三帝国の言語」は、それまでにドイツ語圏で使用されていたレトリックと無縁ではなかったという<sup>1</sup>。そうであるならば、ワグネリアンであるアドルフ・ヒトラー(Adolf Hitler, 1889-1945)が「第三帝国の言語」を形づくったとき、自らが敬愛し、「言葉」のプロフェッショナルでもあったワグナーから影響を受けなかったということがあるだろうか? 本論では、すでに研究が進んでいる「第三帝国の言語」の特徴に基づいてワグナーの言語を分析し、両者の関係について考察を加えたい。

### 2. ワグナーとヒトラー

ヒトラーがワグネリアンであったことは、よく知られている。ヒトラーはパイロイトのワグナー音楽祭にも参加し、しばしば、ナチス党の

---

1 ペーター・フォン・ポーレンツ(岩崎英二郎ほか訳):『ドイツ語史』、白水社、1974年、182-194頁参照。

党大会における自らの入場曲として、ワーグナーの作品を使用する。これは、ワーグナー作品の重厚さ・荘厳さを利用して、自らに威厳を与え、神々しい存在として演出するためであった<sup>2</sup>。

また、ワーグナーの掲げた優性民族思想が、ナチスの世界観を築き上げていったとする説は、すでに多くの著書・論文において論じられてきた。とりわけ、ヨアヒム・ケーラー (Joachim Köhler) の『ワーグナーのヒトラー』<sup>3</sup>では、ワーグナーの作り上げた「神話的」で「黙示録的」なヴィジョンに心酔したヒトラーが、それを成就しようと努めたとし、二人を、その世界観の「預言者」と「執行者」として位置づけてすらいる。実際、ワーグナーはその作品のテーマに、好んで「ゲルマン的なもの」を採り上げた。さらに、反ユダヤ主義者でもあった。彼は、『音楽におけるユダヤ性』(1850)において、「[...] ユダヤ人の地位は、もう解放を必要とするところの話ではない。彼らこそが支配者であり、金力の前に人間のあらゆるいとなみが膝を屈する限り、ユダヤ人の支配は続くであろう」<sup>4</sup>と述べている。この引用が、ヒトラーの『わが闘争』(1925/1927)からの引用だと主張したとしても、納得する人は多いことだろう。ユダヤ人に対する姿勢だけでなく、「言葉」や「音楽」に対する姿勢にも、ワーグナーとヒトラーの共通点が見える。ワーグナーは『オペラとドラマ』(1851)のなかで、オペラにおいては、「ドラマ」または「詩」を表現することが目的であり、「音楽」はその表現のための手段であるとしている。これは、そっくりナチスの理念に置き換えられる。党大会などでは「演説」または「言葉」を表現することが目的であり、「音楽」や「パレード」はその表現を助けるための手段である。

ワーグナーはオペラ作家として、そしてヒトラーは演説家として、ともに「言葉」のプロフェッショナルであった。ワーグナーから思想的に

2 ワーグナー作品とオペラの演出を大いに取り込んだナチスについては、長木誠司の『第三帝国と音楽家たち』などに詳しい。長木誠司：『第三帝国と音楽家たち』、音楽之友社、1998年を参照。

3 ヨアヒム・ケーラー (橘正樹訳)：『ワーグナーのヒトラー』、三交社、1999年。

4 リヒャルト・ワーグナー：『ワーグナー著作集1』、第三文明社、1993年、64頁。

大きな影響を受けたヒトラーは、「言葉」に関してもワーグナーの影響があったのではないだろうか？

### 3. 「第三帝国の言語」における理念と修辞法<sup>5</sup>

実際にワーグナー作品を考察する前に、「第三帝国の言語」および一般的なレトリックについて述べておく必要があるだろう。

ヒトラーいわく「大衆の受容能力はとても限られていて、理解力は小さく、そのため忘れやすさは大きい」<sup>6</sup>ため、自らの意図を大衆に教え込むには、言語を操作して教え込みやすくする必要があった。こうして形づくられたのが、「第三帝国の言語」である。その「第三帝国の言語」におけるヒトラーの言語操作理念の中でも、とりわけ『わが闘争』で自らが重要な要素として挙げているのが以下の3つである。

1. 「それが取り扱うどの問題に対しても、根本的主観的一方的な態度」<sup>7</sup>：ここでは、特に大衆の理解力の小ささに目を向けており、理性的判断力が小さくても意図が飲み込めるように、一方的な語り口、単純な語り口にすることの重要性を示している。
2. 「どの効果的プロパガンダも、わずかなポイントに制限してスローガン的な方法で、期待されたことが最後の一言まで想像できるまで続けなければならない」<sup>8</sup>：ここでは、特に大衆の忘却力の大きさに目を向けており、できるかぎり忘れにくくするために、先鋭化された語り口で繰り返し続けることの重要性を示している。
3. 「どのプロパガンダも民衆的であるべきで、その知的水準は、プロパガンダが向けられる者の中で最も受容能力の限られた者に合わせるべき」<sup>9</sup>：ここでは、特に大衆の受容力の偏狭さに目を向け

---

5 この章の引用文は、すべてHitler, Adolf: Mein Kampf. München: Franz Eher Verlag, 1939.からの引用である。

6 Hitler 1939, S. 198.

7 Hitler 1939, S. 200.

8 Hitler 1939, S. 198.

9 Hitler 1939, S. 197.

ており、知的水準の低い大衆に合った語り口、大衆が求める語り口にすることの重要性を示している。

これらの3つの要素をより一般化させると、「言語の単純一方化」、「言語の反復誇大化」、「言語の大衆仕様化」とまとめることができるだろう。「第三帝国の言語」では、こうした理念にそって、以前からあった言語慣用が、「ファシズムの政治的、社会的、経済的な原因と特徴とを糊塗するために」<sup>10</sup>利用された。

古典修辞学におけるレトリックは、マルクス・ファビウス・クウィンティリアン (Marcus Fabius Quintilian, 35-96) によれば、„immutatio“ (語句の代用・転義)、„detractio“ (語句の省略)、„transmutatio“ (語句の配列換え)、„adiectio“ (語句の追加・補足) の4つの原則によって行われる<sup>11</sup>。「第三帝国の言語」および「第三帝国の言語」において利用された旧来の言語慣用もまた、この原則に沿って分類できるだろう。たとえば、「ユダヤ人は寄生虫である」という語句は、「単純一方化」の理念によって、„immutatio“ の原則を用いて作られたレトリックである。「ユダヤ人はドイツ社会に寄生する存在である」と決め付けることで現実を「単純化」し、そして、「社会に寄生する存在」と言うべきところを「寄生虫」という別の語句で „immutatio“<sup>12</sup> することによって、ユダヤ人に対する否定的イメージをより鮮明にしている。

次章では、『タンホイザー』にみられた「第三帝国の言語」の特徴のうち、いくつかを紹介する<sup>13</sup>。

---

10 ポーレンツ 1974年、194頁参照。印象的なのは、『ドイツ語史』においてポーレンツが、こうした言語操作を、語の「音楽」と呼んでいることである。

11 Vgl. Fix, Ulla / Poethe, Hannelore / Yos, Gabriele: Textlinguistik und Stilistik für Einsteiger. Frankfurt / M: Peter Lang Verlag, 2001. S. 56-57.

12 こうした „immutatio“ を、特に „Metapher“ (隠喩法) と呼ぶ。

13 「第三帝国の言語」およびナチ・レトリックの特徴に関しては、以下に詳しい。宮田光雄：『ナチ・ドイツの精神構造』、岩波書店、1991年、140-190頁。ポーレンツ 1974年、182-194頁。

#### 4. 『タンホイザー』にみられる「第三帝国の言語」的特徴<sup>14</sup>

「第三帝国の言語」の語り口として、宮田（1991）では「断定的主張」「くり返し」「単純化」「一般化」を挙げている。これらは、第1幕第2場のヴィーナスの語り口に端的に表れている。この場面でヴィーナスは、平叙文・命令文を合わせても54回しか用いていないのに対して、実に29回も疑問文を用いている。また、これらの疑問文は、返答・情報を得ることを目的とした疑問文ではない。たとえば、「[...] ああ！ 彼はなんて言ったのかしら？ もう私の元には戻ってこないって！ [...]」<sup>15</sup>のような自問自答や、すでにタンホイザーがヴィーナスの国に長く居すぎたために祖国に帰ろうとする際の「[...] 私の愛を馬鹿にしてるの？ 私の愛を讃えておきながら、私の愛を遠ざけるつもり？ 私の魅力にも飽きたっていうの？」<sup>16</sup>という詰問は、いずれも疑問から発せられるものではない。自問自答においても詰問においても、あらかじめ自らが予期した返答があり、それを一方的に言明する・言明させることによって事実関係を再確認させ、その事実関係を強調するというレトリックである。これは、本来、既知の事実として平叙文で述べるべきところを疑問文に置き換えた „*immutatio*“ とも言えるだろう。この例の場合、自問自答では、自らを絶望させた情報である「タンホイザーは戻らない」を自ら再び言明することによって、自らの絶望の度合いをより際立たせている。また、詰問では、「タンホイザーはヴィーナスの愛に飽き、彼女の元を去る」という事実を知った上で彼自身にそれを言明することを要求し、罪悪感に訴えかけるという効果を生んでいる<sup>17</sup>。こうしたレトリックは、

---

14' この章での引用文は、すべて Wagner, Richard: *Tannhäuser*. Hrsg. von Csampai, Attila / Holland, Dietmar. Reinbek bei Hamburg: Rowohlt Taschenbuch Verlag, 1986. からの引用である。また、以下の数量的表示はパリ版に基づくものである。

15 Wagner 1986, S. 42.

16 Wagner 1986, S. 40.

17 この場面では、タンホイザーは言明を避け、さらにヴィーナスに「裏切り者」とか「恩知らず」とか罵られることになる。

宮田（1991）で「断定的主張」の語り口の「『対話』形式」として触れられている<sup>18</sup>。そして、ヴィーナスは、こうした予め返答が予期された「『対話』形式」の疑問文を「繰り返し」ている。これは、同一内容を追加・重複させて効果を増していくタイプの „adiectio“<sup>19</sup> である。

次に、語彙に関して見てみよう。もっともよく知られた「第三帝国の言語」の語彙は、„Heil Hitler!“（ヒトラー万歳！）で知られる „Heil“ であろう。『タンホイザー』劇中でも頻繁に使われており、実に36回も登場する。また、そのうち押韻しているものはわずかに3回だけであり、„zuteil (werden)“（与えられる）との押韻が2回と、„verweilen“（留まる）との押韻が1回である。これはつまり、„Heil“ の多用が、押韻に由来するものではないことを証明している。「万歳！」に近い表現としては、「賞賛あれ！」という表現がある。この意味で頻繁に使われている語彙では、名詞 „Preis“（賞賛）、動詞 „preisen“（賞賛する）、さらに過去分詞派生名詞 „Gepriesene“（賞賛されたる者）があるが、これら全てを合わせても31回しか使用されていない<sup>20</sup>。こうした傾向を見ると、„Heil“ は「第三帝国の言語」と同様に多用されていた、という仮説が成り立ちそうに見える。しかし、実際は違う。なぜなら、劇中の „Heil“ は、ほとんどが「魂の救済」という意味で使われており、「万歳！」にあたる間投詞として用いられているのは、36回中わずかに8回のみだからである。„Heil“ という語彙は古代より歓呼の声として用いられてきたが、1846年以降には体操家たちの間で挨拶として „Gut Heil!“ が用いられるようになった。また、猟師の „Weidmannsheil!“、漁師の „Petri Heil!“、スキーヤーの „Schi Heil!“ といった挨拶もある<sup>21</sup>。こうした挨拶が一般的に行われ

18 宮田 1991年、142頁参照。

19 こうした „adiectio“ を、特に „Parallelismus“（並列法）と呼ぶ。

20 „Preis“ 19回、„preisen“ 10回、„Gepriesene“ 2回である。「褒美」という意味で使われた „Preis“ 2回は、統計に入れてない。ちなみに、„Gepriesene“ は、聖母マリアに対して1回と、エリーザベトに対して1回使用されている。この語ひとつとっても、エリーザベトと聖母との共通性（魂の救済者）を見ることができる。

21 野村敏晴編：『別冊歴史読本14 ヒトラーハンドブック』、新人物往来社、1997年、57頁参照。

ていたことを考えると、『タンホイザー』において（代表的な「第三帝国の言語」である）間投詞としての „Heil“ が多用されていたとは言えないだろう。

間投詞としての „Heil“ に限らず、『タンホイザー』においては、宮田（1991）に挙げられている「第三帝国の言語」的語彙（「スラングとスローガン」、「技術用語と官庁用語」、「軍사용語」）<sup>22</sup>は、あまり目立たない。それに対して、魂の救済を描いたドラマであるので、「救済」という意味での „Heil“ も含め、宗教的な語彙（„heilig“、„Gnade“、„Himmel“、„Seele“ など）が多い。これらの語彙は、一見、「第三帝国の言語」とは無関係のようにみえる。しかし、ここがレトリックの罠なのである。今日、„Heil“ と聞けば誰もがナチズムを連想するに違いないが、「第三帝国の言語」が広まった当初は、日常的な挨拶として用いられていたこともあり、それがゲルマン性や神性を無意識下に想起させる「第三帝国の言語」だと気づく者は、少なかった。このように、プロパガンダの意図は、しばしば日常的な語彙を用いることで隠蔽されているのである。『タンホイザー』では、宗教的な語彙が多用されており、聞き手は無条件にその語彙の中にキリスト教性を見出すだろう。しかし、それらは意図的に „immutatio“ として用いられているのである。このレトリックは、「第三帝国の言語」の中の「擬似宗教的言語」と言われているものに相当する<sup>23</sup>。このオペラでは、キリスト教とは相反するはずのヴィーナスに対してこうした宗教的語彙が用いられており、聞き手は無意識のうちに、反キリスト教的存在であるはずのヴィーナスを、唯一絶対であるはずのキリスト教性と対等視するようになる。

## 5. おわりに

「第三帝国の言語」との共通性を『タンホイザー』に探し、いくつかを発見することができた。ワグナーはもちろん、こうしたレトリックをナチズムのために用いたわけではない。ワグナーは、「ゲルマン的な

---

22 宮田 1991年、153-163頁参照。

23 宮田 1991年、186-190頁参照。ヒトラーは、このレトリックを用いてナチズムを宗教化し、自らを神格化させた。

もの」のために用いたのであろう。„deutsch“ という語彙すらわずかに2回しかが出てこないが、言語の面からみた『タンホイザー』は、十分に「ゲルマン的」であるように思える。なぜなら、キリスト教的語彙が、ドイツの民間伝承におけるヴィーナスに対しても流用され、キリスト教とドイツの民間伝承が対等視されるように、言語的に仕向けられているからである<sup>24</sup>。そして、そのレトリックは、クレンペラーが「第三帝国の言語」を評したように、以前からのドイツ語の「価値」や「頻度」を変え、元来のドイツ語とすり替わったものであった。

---

24 ヴィーナスは本来ローマ神話の神であるが、ワーグナーは、チューリンゲンのヘルゼルベルク山に伝わる伝説に沿って『タンホイザー』を作ったのであるから、名前こそヴィーナスではあるが、ゲルマン神話の愛の女神として扱うべきだろう。ちなみに、聖エリーザベトも、史実ではハンガリー人であるが、劇中ではドイツ人君主の姪となっている。